

選者 川口孤舟

句会出席 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ

豊田ゆたか(選句のみでご出席) 古田昇 星田啓子

投句・選句 熊谷くにお 小早健介 田島正己 土谷堂哉 福島正明 古川百合子 山崎亜也

山内天牛 渡邊盛雄

投句のみ 西澤國護

選句のみ 梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章 山田けい子

山本三恵



【互選句】 ◎が付されている句は孤舟選者の選

○は選句した会員による天(特選)

十二点

◎風光る少し短く髪切つて

千恵

(孤・くす・く・健・と・龍・堂・允・正
○啓・け・天)

十点

春うらら児の髪にある陽の匂ひ

とみ子

(そ・忠・く・孝・千・堂・昇・け・三
天)

九点

せせらぎに耳を遊ばせ芹を摘む

孤舟

(そ・た・清・ゆ・允・百・○昇・啓・盛)

七点

◎診察を終えて安堵の桜かな

忠彦

(孤・そ・く・た・○孝・己・盛)

◎母を恋ふ雉の子鳴くや瀉の暮

くにお

(孤・くす・五・己・ゆ・昇・三)

◎初燕よくぞ長旅乗り切つて

百合子

(孤・忠・健・と・た・ゆ・亜)

六点

落椿人もいづれば地に還る

孤舟

(○くす・健・孝・龍・隆・亜)

落研の逸る出囃子春の宵

堂哉

(○健・龍・昇・三・亜・盛)

◎掌(てのひら)に小さき幸せ花吹雪

啓子

(孤・と・己・堂・允・百)

◎卒寿は通過居ねむりの日々風薫る

盛雄

(孤・孝・ゆ・允・正・け)

五点

桜餅指に残れる香りかな

忠彦

(く・己・け・百・天)

壺焼の煮汁もて火を怒らしむ

孤舟

(五・百・昇・亜・天)

◎乗込み鮎しきりに尾鰭打ちにけり

くにお

(孤・五・啓・百・三)

清めたる墓石にひらり落花かな

千恵

(くす・己・堂・允・亜)

◎白鷺の抜き足差し足川溜まり

啓子

(孤・くす・五・○千・正)

四点

桜散る龜山城の武者返し
◎冗談の積りが仇に四月馬鹿
春風や何処かで不穩の匂いして
初つばめ無縫の宙を袈裟斬りに

ただしげ
昇
正明
孤舟

(く・清・昇・け)
(孤・健・と・千)
(孝・龍・啓・○盛)
(くす・た・清・○己)

三点

春眠や幼き日々の父母の夢
芝焼いて地肌放心してゐたり
猪に遠足の列乱れけり
にぎやかに遠足の列改札へ
◎句会終へ語らひ尽きぬ宵の春
青き踏む大型二輪の初デート
春愁や聖堂に座すピエタ像

忠彦
孤舟
健介
とみ子
千恵
正己
昇

(そ・隆・百)
(○と・啓・○三)
(く・忠・天)
(清・堂・天)
(孤・た・清)
(千・隆・亜)
(五・清・正)

二点

花びらが車輪のように走りけり
回忌終え葉桜の下の人となる
春野来て伸びする吾子の小さき手
◎畏みて花の皇居を通り抜く
戦火なき平和日本の花の宴
小手毬に日差し和らぐ小庭かな
子犬連れカフェに沈む花疲れ

忠彦
五郎太
正己
昇
全
亜也
盛雄

(健・隆)
(千・啓)
(そ・と)
(孤・五)
(忠・ゆ)
(堂・ゆ)
(正・三)

一点

救急のサイレン響く花の闇
俯ける血色のローズ受難節
青雲の志や紺の服入社式
飛行機雲手庇に入れ青き踏む
恒例の母の電話よ万愚節
気に入りのジャズ聞く夜の春時雨
陽の光花水木咲く穏やかさ
もう夏か着替えのポロの色まよい
五月病忍び寄る影慎重に

五郎太
五郎太
健介
とみ子
全
千恵
ただしげ
國護
全
昇

(そ)
(啓)
(允)
(盛)
(孝)
(○龍)
(正)
(龍)
(盛)
(孤)
(け)
(ゆ)
(た)
(千)
(隆)
(隆)

◎寅さんの下町情話春うらら

初つばめ国立駅に到着す
眠りから覚めし新芽の紅き色
山覆ふ淡きくれなひ山桜
極め付け壬生菜刻みて菜飯とす
タクシーの窓からのぞく花水木
お花見は息子のくれしラインだけ

百合子
啓子
全
亜也
天牛
全

(孤)
(け)
(ゆ)
(た)
(千)
(隆)
(隆)

SSSSSSS

【句評・短評】

十二点

風光る少し短く髪切って

千恵

孤舟選者・・・頸元をサツパリとしてやわらかな風を受ける。

とみ子さん・・・髪をカットして 夏を迎える準備が整いました！

堂哉さん・・・「コロナ以降、家内に刈ってもらっています。今回は短くと注文をつけました

允章さん・・・切るほどの髪はもうないが、若いころのさわやかな思い出。

啓子さん・・・爽やか！ 季語の斡旋で十七文字で爽やかな風が髪を揺らす様子まで感じられます。

天牛さん・・・春が来ました。さっぱりとしてくれと床尾屋さんに頼んだのでしょうか。

十点

春うらら児の髪にある陽の匂ひ

とみ子

千恵さん・・・幼児の髪にあたる陽の匂いを嗅いだ気がしました。

昇さん・・・陽光に輝く健康的な幼児の毛髪の香気。

天牛さん・・・別に春うららでなくてもいいでしょうが、特に遊びほうけた男の子の頭においてすよね。

九点

せせらぎに耳を遊ばせ芹を摘む

孤舟

ただしげさん・中七の表現が秀逸

允章さん・・・子供の頃の懐かしい思い出。祖母のおひたしがとてもおいしかった。

百合子さん・・・私もその場にいるかのような臨場感。十七文字の表現力のすばらしさ。

昇さん・・・静謐な情景。こんな姿の美しい句に憧れる。

盛雄さん・・・小生、富士山麓に住んでいた頃を想い出す。水がよどみなく流れる小川の芹は柔らかく美味でした。

七点

診察を終えて安堵の桜かな

忠彦

孤舟選者・・・診察結果が良好でやれやれ一安心。

ただしげさん・齢を重ね病を持つと良く理解できる。

孝岳さん・・・年齢を重ねると健康が一番の関心事。診察を終えて問題ないことが判明してはじめて

桜の季節を感じる。この穏やかな気分は最高。

盛雄さん・・・大きな心配がなかった帰路の桜は美しかったでしょう。

母を恋ふ雉の子鳴くや潟の暮

くにお

孤舟さん・・・雉は子を庇う親の愛情で知られる。

昇さん・・・一幅の掛軸のよう。母を恋ふ子の気持ちを雉に仮託。

五郎太さん・・・まだ囀り。やがて、「ケーン ケーン」と高く、鋭く鳴くのでしょうか。

初燕よくぞ長旅乗り切って

百合子

孤舟選者・・・よくぞ長旅に耐えて飛来してくれた。

とみ子さん・・・渡ってくる燕への ねぎらいの優しいお気持ちが、よくわかります。

ただしげさん・数千キロの長旅とか！お疲れ様。

亜也さん・・・この国を選んで子育てまでしてくれることのありがたさ。

六点

落椿人もいづれば地に還る

孤舟

龍平さん・・・生物の死因は例外無く生誕なり とか？

隆さん・・・椿は満開になると落下する。日本人の死生観、無常観に合う。

「満開を愛でる間もなく落ち椿」でも。

亜也さん・・・しみじみとした諦観。

落研の逸る出囃子春の宵

堂哉

健介さん・・・何事にも素人は逸りがち。和やかな春の宵の微笑ましい雰囲気サラッと詠まれていきます。

龍平さん・・・いいですね この春の気分。

昇さん・・・勇み立つ落研の様子が伝わってくる。でも、もう少し肩の力を抜いて。

亜也さん・・・「逸る」が若人たちの姿を彷彿とさせて秀逸。

盛雄さん・・・新人の多い落研でしょうか。逸る雰囲気は良くできています。

掌(てのひら)に小さき幸せ花吹雪

啓子

孤舟選者・・・花弁を掌に受ける幸せ。

允章さん・・・舞い散る花弁をぱつと掌で掴む。幸せを掴むように。

とみ子さん・・・こんな小さな事を 幸せと思うお気持を察すると、うるつとしました。

百合子さん・・・亡くなる前の年に母と国立大学通りの花見に行きました。車椅子の母に花びらが降りそそぎ「あぁいい冥途の土産だわ」と呟いた母。

卒寿は通過居ねむりの日々風薫る

盛雄

孤舟選者・・・百歳まで生きる積りなので、九十歳はまだ通過点に過ぎない。

允章さん・・・卒寿にはもう少し間があるが、その頃には、こんな感じだろう。

五点

桜餅指に残れる香りかな

忠彦

百合子さん・・・桜餅の季節になると、日本に生まれてほんとうに幸せ!!!

天牛さん・・・勿論塩漬けにした桜の葉の香りですが。簡単な表現で今年の春を感じさせますね。

壺焼の煮汁もて火を怒らしむ

孤舟

五郎太さん・・・炎がぱつと最後に燃え上がった。さてお酒を酌もう。

百合子さん・・・あつという間もなく、じゅじゅつと噴きこぼれ、香ばしい匂いが辺り一面に、後始末はちよつと大変ですが。

昇さん・・・壺焼の煮汁が飛び散り一段と火勢が強まる。下5の措辞が秀逸。

天牛さん・・・じか火でさざえ(ターバンシエル)のつぼ焼きとは、今時しやれていますね。火が消えそうになって、また燃え上がったのでしょうか。

亜也さん・・・あれ、必ず煮こぼれるんですね。大袈裟なことの面白さ。

乗込み鮎しきりに尾鰭打ちにけり くに

孤舟選者・・・鮎が網から逃れんと懸命。

五郎太さん・・・春先の鮎の勢いの良さ。生気を感じます。

百合子さん・・・これから産卵が始まるのでしょうか。この季節の鮎、乗込み鮎と言うのですね。俳句でまた初めて知りました。

清めたる墓石にひらり落花かな

千恵

允章さん・・・我が家の墓域のそばに、桜の古木があり毎年見慣れた景である。
亜也さん・・・いかにも春の墓参の景。平明さに惹かれた。

白鷺の抜き足差し足川溜まり

啓子

孤舟選者・・・水中の獲物を鋭く見据えながらゆっくり移動する鷺。
五郎太さん・・・巧みな表現、川溜まりも上手です。
千恵さん・・・読んですぐに白鷺の歩く姿が脳内に浮かびました。まさにそのとおり！ですね。

四点

初つばめ無縫の宙を袈裟斬りに

孤舟

ただしげさん・燕の飛ぶ様子を「袈裟斬り」とは面白い
正己さん・・・宙を飛ぶつばめの素早さがよく伝わってきます。

桜散る亀山城の武者返し

ただしげ

昇さん・・・明智光秀ゆかりの亀山城か？上5から悲運の武将の最期を彷彿。四国の別名丸亀城の
声もあり。

冗談の積りが仇に四月馬鹿

昇

孤舟選者・・・ほんの冗談話が不本意にも真剣にとられてしまった。
千恵さん・・・気の利いた罪のない“嘘”をつくのはなかなか至難の業です。イギリス人にはかな
いません。

とみ子さん・・・他愛無い嘘がよろしいようでー

春風や何処かで不穩の匂いして

正明

龍平さん・・・地震／津波／山火事／酷暑日／花粉黄砂 昨今は日替わり登板!! アーア 何という世
の中。

啓子さん・・・不穩の匂いが良いと思います。季語が匂いと呼応。温暖化も分かり。世界のそこか
しここで戦争が続き、新たに突然の侵攻が始まることをも憂いて。

盛雄さん・・・内外に幾つもの不穩なニュースが多い昨今、作者はそれを匂いで感じる繊細さ・・・
凄い

三点

春眠や幼き日々の父母の夢

忠彦

隆さん・・・父母の夢は、最高の幸せだと思うのです。見ようと思っても見れません。
百合子さん・・・この年齢になって初めて知りました。幼き日の記憶、新鮮な細胞に刻まれた記憶が、
いかに鮮やかであるかを。

芝焼いて地肌放心してゐたり

孤舟

とみ子さん・・・芝焼きのあと 地肌が放心状態であるという発想に感心しました。
啓子さん・・・野焼きの後、地肌が放心していると見た作者の措辞に脱帽しました。今頃は新芽が出
そろっていることでしょう。命のつながりが感じられます。

三恵さん・・・焦げた地面を。地肌と見立てられたのでしょうか。面白いです。実は、焦げ臭さと同
時に新しい土の匂いも漂ってきました。

猪に遠足の列乱れけり

健介

天牛さん・・・本当は猪じゃないでしょう。本当の猪なら大ごとです。俳句は時にはエグザゼレート
することが大事ですから。

にぎやかに遠足の列改札へ

とみ子

堂哉さん・・・「引率の先生、ご苦勞様です！」

天牛さん・・・勿論これから汽車に乗るのでしょうね。皆ウキウキしている様子が出てくるようになります。かります。

句会終へ語らひ尽きぬ宵の春

千恵

孤舟選者・・・楽しかった句会を反芻して一杯。

ただしげさん・・・句会後の一杯、楽しいものです。

青き踏む大型三輪の初デート

正己

千恵さん・・・少し季語が情景には遠いようにも感じましたがナナハンで初デートに誘う気合が感じられて微笑ましかった。

隆さん・・・初デート、いいですねえ。彼女が安全のために腕を回す。風を切って高速で走る

バイクはいつになっても踏青です。

亜也さん・・・一台とは限らない。近年はハーレーを颯爽と乗りこなす女性ライダーも珍しくない。

春愁や聖堂に座すピエタ像

昇

五郎太さん・・・復活に先立つ受難の春は悲しみに満ちた聖像を見る事が多い。

二点

花びらが車輪のように走りけり

忠彦

隆さん・・・よく見る光景ですね。韻文的に「花びらの車輪となるや右往左往」はいかがでしょうか。

回忌終え葉桜の下の人となる

五郎太

啓子さん・・・何度目のご法要でしょう。中七の措辞で無事お式が終わってほっとした思い、一方ではしみじみとしたお気持ちに包まれているご様子が表されていると感じます。

春野来て伸びする吾子の小さき手

正己

(そ・と)

とみ子さん・・・これからのお子さんの成長が 楽しみです。

畏みて花の皇居を通り抜く

昇

孤舟選者・・・大阪の通り抜けに負けるとも劣らない高貴な桜桜。

五郎太さん・・・皇居はソメイヨシノが中心のようです。ここ数年で、春秋の皇居通り抜けは定着しました。

一点

俯ける血色のローズ受難節

五郎太

啓子さん・・・確かにクリスマスローズは皆俯いていますね。イエス・キリストの受難を思い、血と俯いた姿の花に想いを託されたのでしょうか。

※亜也さん・・・好みでしたが、季重なりが気になり一旦措きました。

青雲の志や紺の服入社式

健介

允章さん・・・新調の背広を着て、数百人の入社式だった。今でも当時の仲間と時々一杯やっている。気に入りのジャズ聞く夜の春時雨

千恵

龍平さん・・・Miles Davis「死刑台のエレベーター」トランペット流れる小雨のParisは宵 恋人を

探す Jeanne Moreau 忘れ得ぬ往時の映画を回想させて頂きました。

五月病忍び寄る影慎重に

國護

盛雄さん・・・若い人への思いやりの一句。

寅さんの下町情話春うらら

昇

孤舟選者・・・柴又・帝釈天通りの団子屋界隈の賑わい。

山覆ふ淡きくれないなひ山桜

啓子

ただしげさん・吉野山を思い出させる。

極め付け壬生菜刻みて菜飯とす

亜也

千恵さん・・・ほんの短い期間しか味わえないものをちゃんと賞味するその気概に一票！

タクシーの窓からのぞく花水木

天牛

隆さん・・・今年が開花が早いように思えました。「タクシーの窓ゆく並木花水木」でも。

お花見は息子のくれしラインだけ

天牛

隆さん・・・最近ガン患者を見舞いました。写真、Youtube 動画を楽しみました。

帰省が叶わなくても満足してもらいました。



【次回青葉会 句会ご案内】

五月は定例の「吟行」を催行致します！

日時：吟行日時：五月二十八日(木) 午前十一時集合く十二時半目処

吟行(俳句材料を探す散歩) 場所：千代田区 日比谷公園

集合場所：日比谷公園 日比谷通り日比谷交差点に接した出入口

散策を終えて、みなさま揃って十二時半から会食を予定しております。

場所は、中華料理 煌蘭(こうらん) 丸の内支店。

※ご出席予定の方には 吟行会場集合場所、会食場所を含めた詳細を別途

メールにてお送りしております。

一方、4月句会報にてお知らせしております通り、今回の吟行は、本来の段取りがかわり
ます。俳句材料を探して懇親を深めるものとして、「吟行もどき」の会とし、通常の散策後
「句会」は開催致しません。

ご出句は、左記のとおりで普段と吟行参加者のみ少し異なるだけです。

五月二十三日(土)中に当季雑詠にて、星田までお送りください。

○吟行参加者は、全五句の内、3句から4句を 事前にお出しいただきます。

○ご投句の方は、いつもと同じ句数をお出しく下さい。出来るだけその中にお近くを散歩
されるなど吟行の気分も添えた句をいただけると有難く存じます。一句く二句増えても喜ん
で頂戴致します。

吟行ご参加の皆様の作句を吟行の日、或いは翌日のお昼までに頂戴するため、選句表をお
送りする日程が五月二十九日(金)と、通常より遅くなります。また、選句は吟行句も一緒
に混ぜてお送りいたしますので、吟行句か否かを気にせず選句していただきます。

六月の句会予告

日時：六月二十五日(木) 十三時〜

場所：世田谷区三軒茶屋 区の施設「しゃれなあど」6階 ビーナスの間

ご出句〆切：六月二〇日(土)中

【ご挨拶：本年四月より青葉会を新体制と致しました】

この度青葉会代表を仰せつかりました久米五郎太です。

青葉会には2000年代の初めに入会いたしました。句作の経験がほぼ皆無でしたが、山内了一（俳号天牛）氏に声をかけられ、一度句会に出席したのがきっかけです。それ以来仕事や海外出張などで休むこともありましたが、四半世紀にわたり月例の句会に参加し、二百回、三百回、四百回の記念句集にも句を出しております。ほぼ四半世紀の間、句を作ってはいませんが、自分らしい句、深みのある句、詩を感じさせる句を作ることの難しさを感じています。ここ数年は月例会で披講役を務めております。

青葉会は、改めて申し上げるまでもないかと思いますが、1985年に「萬緑」主宰の中村草田男の高弟、「萬緑」同人たる川合友之（絹漱）氏（当時丸紅取締役）を指導者として発足した、丸紅の役職員・OB・Oからなる俳句同好会、いわばサークルです。絹漱先生が亡くなられた1999年からは、「萬緑」同人で同誌編集にも携われていたご夫人の川合万里子氏の指導を受け、2017年からは丸紅OBで「爽樹」元代表、現選者の川口襄（孤舟）氏の指導を受けております。

初代代表世話人の朱牟田静雄（恵洲）さんの時代にはメンバーはほとんど現役だったと聞いておりますが、会員の皆さんの高齢化が進み、現在はほとんどの方が丸紅をリタイアしています。第二代表世話人を長く務めた今井紀久男さんが、現役だけでなくOB・OG、さらに丸紅と縁のある人たちに声をかけ、会員数が一時だいぶ増えましたが、最近では少し減り気味で、総数は30人弱となっています。メンバー（句友）のお住まいは関東が中心ですが、関西や北陸の方もおられ、ネットだけの参加の方もおられます。

青葉会はこのように四十一年の歴史を有し、この四月には四百八十回目の月例会を持ち、来年十二月には五百回目という大きな節目を迎えます。句会の運営は、都内で集まって行い、いわゆるリアルでの月例会を中心に、ネットでの参加（出句・選句）を組み合わせた形で行なっています。高齢者が増えましたので、だいぶ簡素化してはいますが、吟行や観劇も続いております。

昨今は、テレビでのプレバトやエッセイ俳句、俳句甲子園などで俳句に接する機会が多くあり、俳句に興味を持つ方が増えているように見受けられます。丸紅の現役やOB・OGの皆様、その他丸紅とご縁がある方がたのご入会を歓迎しております。一度句会にお運び頂き、選句をしたりしてみませんか。

4月からの運営は、選者でもある川口襄（孤舟）氏のご指導を引き続き受けながら、副代表の古田昇氏、関西方面世話人土谷逸郎（堂哉）氏、総務・編集担当の星田啓子さん、会計担当の在間千恵さんという新体制で進めます。会員の皆様や丸紅社友会のご協力・ご支援を得て、歴史ある青葉会を運営して参る所存であります。

どうぞよろしくお願いいたします。

※尚、皆様には気楽に事務局にご連絡いただくべく只今連絡先を準備中です。追ってお知らせいたします。

【青葉会報】

- 一、 今回の四月句会にご出句が十八名、六十二句と少ない数となりました。お体調を崩された方、大変お忙しく海外にお出かけだった方など、いつもより、ご出句された方が二〜三名少なかったことで普段よりほぼ十句少ない中での句会となりました。一方、句会は和気藹々、披講の時間には、近況も織り交ぜながら作句の意味合いなど、気楽な発言の中ではたと気づくことなど多い句会となりました。その結果は、ご覧のように、得票数の多かった1位、2位と女性が並び、十二点の千恵さん、十点のとみ子さん、お二人の爽やかな、又、おっとりとした暖かな句に票が集まりました。おめでとうございます。
- 二、 また、句評・短評は、その句を賞味しつつその価値を引き上げるものとなることも多いようです。句への評価や想いを語ると同時に、ご自分の経験や昨今の世情を含めて話題をご提供いただき、楽しい読みものともなっているようで、茲に改めて感謝申し上げます。

【関係者近詠】

孤舟選者 近詠

ふくろふの口籠り鳴くやしばれる夜
潜きては浮くかいつむり夕陽射し
桃の花咲きて山河を眩しうす
鴨引きし湖細波の光りをり
蠢ける数多の命蝌蚪の紐

句友 土谷堂哉さん

最近、高校の同級生でミシガン大学の教授をしていた秀才が亡くなりガツカリしています。

畏友逝く

ミシガンの足跡著し春の星



村興す古民家と山羊と老梅と
家継ぎの意気のせ寒餅發送す
寒明けの遺影へ泣き言内緒ごと
晩成の友祝ぎ個展へ水仙花
小硬貨余して二月特記なし

眞希子

瑞兆の鳳凰さんざん旅始
鬘を立たせ靡かせ八ヶ岳嵐
音立てて寒馬しきりに馬柵齧む
顔寄せ来鼻筋硬き寒の馬
石尊採る磯へと降りる細階段
鬢付けの行き交ふ春や墨田川
花板のいとも軽ろやか織引く

弘子

雪しんしん街の素顔の見え隠れ
吹雪く夜はひとり蟄居の方丈記
梅笑ふ一輪二輪また一輪
花一輪老梅木に喝采を
げんまんの小指に春の立ちにけり
春立つや和毛の日差し賜りぬ
春の息吹にぶつかる余寒ありにけり

青史

——森の座五月号より 横澤放川（日経新聞俳壇選者）選——

令和八年五月十日

（了）